

冷徹社長の溺愛契約

〽年下秘書は逃げられない〽

後編 試し読み

にやむ書房

Chapter I 亀裂

翌朝、オフィスの空気は昨日以上に重かった。渡辺絵里の存在は、まるで巨大な影のように、社内の至る所に落ちていた。

ひなはいつも通り颯のスケジュール帳を前に座っていたが、その指は震えていた。昨日の颯の言葉が頭の中で反響する。

「代わりなんかじゃない」

その言葉の重みに、心は揺れ動いていた。信じたい。でも、絵里の顔が目浮かぶ。自信に満ちた、美しい顔。自分がそんな彼女の代わりになれるはずがない。

「お茶」

颯の声。ひなは反射的に立ち上がった。給湯室で急須にお湯を注いでいると、窓ガラスに映る自分の顔が見えた。疲れきった顔。目の下にくまができている。

「失礼します」

お茶を颯のデスクに置こうとした瞬間、颯がファイルから顔を上げ、ひなの腕を掴んだ。

「ここを押せ」

颯が示したのは、分厚い契約書の捺印欄だった。ひなが慌てて、預かっている社印を押すと、颯はそのままひなの腕を離さなかった。温かい感触が、全身を駆け巡る。

昼休み。ひなが席に戻ろうとすると、絵里が受付に立っていた。

「少しよろしいかしら」

有無を言わさない笑顔。ひなは頷くしかなかった。近くのカフェに連れて行かれると、絵里はテーブルに着くなり口を開いた。

「昨日も、ずっと颯とご一緒だったんですってね」

「……はい」

「大変でしょう」

絵里は優しく微笑んだ。でもその笑顔の下に、ひなは鋭いナイフを感じた。

「颯は仕事に関しては鬼です。でも、それ以上に、人間関係においては……」

絵里は言葉を飲み込んだ。そして、ひなの目をじっと見つめた。

「あなたが、どれだけ大変か、私はわかるの」

「彼の心は誰にも理解できない。私ですら、理解できなかった」

「え……」

「だから、彼は孤独なのよ。本当の意味で、誰かを愛せない。ただ、所有し、支配したいだけ」
その言葉が、ひなの胸に深く突き刺さった。

「彼があなたに何かを約束したのなら、それは嘘よ」

「違います」

ひなは思わず言った。

「神崎社長は……」

「そう、社長」

絵里は言葉を遮った。

「彼にとって、あなたは社長の秘書。それだけよ。それ以外の何かになることは、決していない」

絵里は立ち上がると、ヒールの音を鳴らして去っていった。ひなは一人残された。カップの紅茶が、冷めていく。

午後、颯は突然社長室から出てきた。

「橘、来い」

颯はひなの腕を掴み、エレベーターへと向かった。閉ざされた空間。何かを言いたかった。でも、言葉が出なかった。

地下駐車場。黒い高級車に乗り込むと、颯は何も言わずにエンジンをかけた。

「どこへ……」

「黙っていろ」

颯の声は冷たかった。車は静かに走り出した。やがて着いたのは、颯のマンションだった。

「入れ」

颯が部屋のドアを開けた。週末を過ごした、あの部屋。でも、今日の空気は違っていた。

颯はグラスに水を注ぎ、ひなに差し出した。ひながグラスを受け取ると、颯は隣に座った。近すぎる距離。

「今日、絵里に何を言われた」

「……あなたは誰も愛せないのだ、と。私は、秘書以上の何かには決してなれないのだ、と」

「違う」

颯は立ち上がると、ひなの前で膝をついた。ひなの手を握る。その手が、わずかに震えていた。

「彼女は俺の過去だ」

「では、私は……」

「俺が決める。お前の居場所は、俺が決める」

その言葉に、ひなの目から涙が溢れた。颯は立ち上がると、ひなを抱き上げ、ベッドへと運んだ。

「これからは、契約ではない」

「……はい」

颯はひなをベッドに横たえたと、自分も隣に寝転んだ。上からではなく、横に並んで。いつもと違う距離感に、ひなは戸惑った。

「怖いかな」

「……いいえ」

「なら、目を閉じるな」

ひなは颯の目を見つめた。その目の奥に、見たことのない感情が渦巻いている。不安、焦り、そしてどこか切なさ。

「俺は、昔、人を信じることができなかった」

颯はゆっくりと語り始めた。

「俺の父は、冷酷だった。完璧でなければ、価値がない、と。俺もそうなったと思っていた」

「でも、お前が来て、少しずつ、変わっていくのを感じた」

「だから、怖いんだ。お前が、俺から離れていくのが怖い」

その言葉に、ひなは思わず颯を抱きしめた。

「離しません」

颯はひなをそっと抱き返した。二人の体がぴったりと寄り添う。その温かさが、全身を優しく包み込む。

「ひな」

颯が初めて、柔らかく呼んだ。

「颯」

ひなは彼の胸に顔をうずめた。

颯はひなの顎をそっと持ち上げた。目が合う。いつもの鋭い目ではなく、どこか迷子のような、そんな目だった。

「触れて、いいか」

「……はい」

その言葉が合図だった。颯はゆっくりとひなの唇を奪った。いつもの支配的なキスとは違う。確かめるような、壊れ物を扱うような、そんな優しさがあった。

唇を離すと、颯はひなの額に自分の額を当てた。吐息が、混じり合う。

「お前が、欲しい」

命令ではなく、告白に近い言葉。ひなの胸がきゅっと締まった。

「……颯」

颯はひなの服をゆっくりと脱がせた。焦らない。一つ一つの動きが、丁寧だった。白い肌が月明かりに浮かび上がる。颯はしばらく、ただひなを見つめた。

颯はひなの首筋に唇を落とした。鎖骨。肩。胸の膨らみの上。キスだけ。舌を使わず、唇だけでひなの体を辿っていく。その焦れたい感触に、ひなの呼吸が乱れていく。

「颯……もっと……」

思わず声が出た。自分でも驚いた。颯の口角が、わずかに上がった。

「自分から求めるのか」

「……っ」

「いい」

横に並んだまま、颯はひなを引き寄せた。二人の体が密着する。颯の熱が、全身から伝わってくる。

「受け入れてくれるか」

命令ではなく、問いかけだった。

「はい」

ゆっくりと、二人が重なっていく。痛みではなく、満たされる感覚。颯の腕がひなの背中を抱きしめ
たまま、動き始める。

「颯……颯……」

「ここにいる」

その声が、ひなの胸の奥まで届いた。揺れるたびに、熱が積み重なっていく。涙が頬を伝った。

「颯……もう……」

「わかった」

颯の動きが深くなる。ひなはもはや何も考えられない。ただ、颯の名前だけを呼び続けた。

「颯……颯……っ！」

やがて二人の体が最後の熱で満たされた。ひなは颯の胸に顔をうずめた。そのまま、時が止まるのを待った。颯の手がひなの背中をゆっくりと撫でた。

「颯……」

「うるさい」

でも、抱く力は緩まなかった。ひなは安心した。この温もりが、現実だ。

翌朝、ひなは目を覚ました。隣で、颯が寝息を立てている。普段は見せない、無防備な顔。ひなはその寝顔を、そっと見つめていた。

「見るな」

目が開いた。颯はすぐに立ち上がった。いつもの完璧な仮面を、もうすでに被っていた。

「今日は午前中、休め」

「え、でも……」

「俺の言うことを聞け」

ひなは黙って頷いた。颯は準備をすると、何も言わずに部屋を出ていった。ただ、ドアを閉める前に、わずかに振り返った。その瞬間だけ、彼の目に、迷いがあつたように見えた。

一人の部屋に残されたひなはゆっくりと体を起こした。昨夜の情事の痕跡が、体中に残っている。でも、それ以上に、心には満足感と、どこか不安な気持ちが混ざり合っていた。

契約ではなくなった。颯はそう言った。でも、本当にそうなのか。ひなは胸の奥に渦巻く感情をどうすればいいかわからなかった。

午後、オフィスに戻ると、ひなのデスクに白い封筒が置かれていた。差出人の欄には、渡辺絵里の名前があつた。

手が震える。封筒を開ける。中には、一枚の写真が入っていた。颯と絵里が楽しそうに笑っている写真。結婚指輪が、輝いていた。

——この写真の真実は、本編で。